

昔むかし、あるところに、王さまと美しいおきさきが住んでいました。ふたりには、王子がひとりありました。

王さまは、おきさきを深く愛あいしていました。ところが、おきさきは、王子がまだ小さいうちになくなってしまいました。王さまは悲しみ、一年がすぎても新しいおきさきをむかえようとはしませんでした。

ある日のこと、ひとりの魔女まじよが、魔法の力でたとえようもなく美しい娘むすめになって、王さまの城しろにやってきました。魔女は、ペールを深くかぶり、王さまに結婚けっこんしたいともうしました。けれども、王さまの心を動かすことはできませんでした。

魔女は、うらみをいだいて帰っていきました。そして、暗くまじい小屋にもどると、かまどに火を起こし、集めてきた薬草をなべに入れてぐつぐつ煮にはじめました。それから、恐ろおそしいことばで薬草にのろいをかけたのです。

たちまち、雪ゆきがはげしくふりはじめ、あたりは、すさまじいふぶきにつつまれました。かみなりが鳴り、恐ろしい音がとどろきました。

王さまの城も、深い雪にすっぽりうずもれてしまいました。雪が城をおおいかくしたとたん、城は大きな岩の塔とうにかわり、王さまも王子もおつきの人たちも、みな、まっ黒なカラスになってしまいました。

魔女はさけぶようにいいました。

「王よ、聞け。おまえは、ひとりのおとめが、ふうがわりな馬車に乗こって凍こった湖をわたる、岩の城の中に入って、年とったカラスにすがたを変えたおまえに口づけするまで、のろわれつづけるのだ」

それからというもの、カラスたちは、少しも休むことができず、雪の中にそびえる岩のまわりを飛びまわっては、悲しそうに、カー、カーと鳴きつづけるのです。岩の塔には、大きな穴あながあいていて、そこから水がわきだしていました。水は、やがて城の庭を湖にかえ、湖は一年じゅう凍りついていました。

さて、魔女には娘がひとりいて、この娘も意地の悪い魔女でした。ただ、とても愚おろかだ



ったので魔法を使うことができず、まずしい木こりの女房にようぼうになりました。夫婦ふうふは仲なかが悪くて、いつもけんかばかりしていました。

木こりには、前の女房とのあいだにうまれた娘があつて、とてもかわいがっていました。魔女の女房は、この娘にいつもつめたくあたり、つらい仕事ばかりさせました。

木こりのうちでは、ねこをいっぴき飼かっていましたが、まっ白な子ねこを四匹ひき生むと死んでしまいました。木こりの娘は、四匹の子ねこをだいに育てました。

ある日のこと、女房が木こりの娘に、

「その子ねこたちを殺ころしておしまい。あの凍こった湖に穴をあけて、水の中に落としておぼれ死にさせるんだよ」といいつけました。

むすめは、悲しくてたまりませんでした。しかたなく四匹の子ねこをふくろにいれて、凍りついた湖へ出かけていきました。

湖の岸に着くと、娘はおので氷をわりました。でも、子ねこたちを穴に落とすことなかでできません。むすめは氷の上に身を投げだして、はげしく泣なきました。そしてそのうち、氣うしなを失ってしまいました。

どのくらいたおれていたでしょう。

「乗りなさい、乗りなさい」

むすめの耳に、だれかのよびかける声が聞こえてきました。はつとして目を開けると、きれいな金色のそりがありました。そりを引いているのは、四匹の子ねこです。娘は、子ねこたちをやさしくなると、そりに乗りこみました。子ねこたちは、そりを引いて走りはじめました。

そりは飛ぶように走り、湖の上をかけぬけていきます。氷がギシギシと音を立ててききました。そりはうまく湖をわたりきつて、むこう岸につきました。

そりは、岩の塔の穴の中に入っていったとまりました。娘がそりからおりると、子ねこたちはまたそりを引いてどこかへすがたを消しました。娘は、穴の中を探しまわりましたが、そりや子ねこたちのすがたはどこにもありません。どこを見ても、苔こけむしてごつごつした岩ばかりです。

そのとき、ほら穴のおくのほうに、明かりがふたつ、ぼんやりともっているのが見えました。

(あれはいったい何かしら)

娘は少しもこわがらずに、明かりのほうへ歩いていきました。すると、年とったカラスが一羽、大きな声でガーガー鳴いていました。首にほうたいをまいています。

「まあ、こんなところにカラスがいるわ。かわいそうに、けがをしているわ」

娘はそういうと、カラスをうでにだいて口づけしました。

そのとたん、世界がこなごなにくだけちるかと思うほど、すさまじい音がとどろきわたり、岩が今にもくずれそうになりました。

気がつくのと、娘は大広間のまんなか立っていました。目の前にひとりの王さまがいました。王さまは、うやうやしく娘に口づけをしていました。

「あなたは私を救ってくれました。どうか、王子と結婚して、私の国の王女になってくれませんか」

やがて、せいだいなお祝いの宴会が開かれました。

私もその宴会にまねかれてごちそうになったんですよ。でも、料理をとろうとお皿にかがみこんだとき、お皿の中におっこちてしまっただけ。それをコックがあまった肉とまちがえて、まずしい人にくれてしまった。まずしい人は、私をふくろにつめると、ここまで運んできたんですよ。わたしがこのお話を知っているのは、そういうわけなんです。

原話：『世界のメルヒェン図書館4』小澤俊夫訳／ぎょうせい刊

再話：村上郁